

視覚支援学校・視覚障害者情報センター改築設計 公募型プロポーザル審査講評

【第2段階審査の経過】

第1段階審査を通過した6社によるプレゼンテーション（ヒアリング）の後、審査を行った。まず、各社の技術提案書の表現等が実施要領に沿ったものかどうかの確認を行った。いずれも要領に抵触するものではないことを確認し審査を進めた。なお、ヒアリングは3名の判定委員で実施し、のちの評価・選定は4名の委員で行った。

評価・選定にあたっては、4名の委員による投票に入る前に、各社の技術提案書の内容についてあらためて順に確認した後に投票に移った。欠席の1名からは各社の技術提案書についての意見が提出されていたため、その内容も確認して、参考意見として扱うこととした。投票は記名とし、あらかじめ設定された評価項目ごとに5段階の評価点数を記入、全員が記入後、事務局で回収、各項目の配点に応じた配分と集計を行った。第1段階での評価点（満点20点）はそのまま持ち越し、第2段階（技術提案書・ヒアリング）の評価点（満点80点）とあわせて100点満点での総計点をまとめた。また、参考資料として各委員による事務所別の評価点も示された。

その結果、A社が82.3点、B社が87.8点、C社が70.5点、D社が61.9点、E社が70.5、F社が75.9点となった。委員別では、3名がB社に最高点を付け、1名がA社に最高点を付けた。また、4名の審査員ともA社およびB社に高い得点を付け、その他4社に付けた評価点とは差があった。

以上の結果を踏まえて、あらためて各社の提案を振り返り議論を行った。議論の結果、B社が評価点2位のA社に約5点の差をつけての最高点であること、委員全員がB社に高い評価点を付していたことから、審査結果の評価点にもとづいて選定することの妥当性を確認した。最終的に、全員一致でB社を設計候補者として、またA社の評価点も3位と大きな差があることから、次点候補者としての妥当性を確認した。

今回の課題は、視覚支援学校（幼稚部、小中高）と視覚障害者情報センターの複合化改築、敷地や既設建物の条件も厳しい現地での建て替え、さらには住宅地周辺環境との調和など難度の高い設計となった。全国でも数少なく、定まった建築の型を持たない視覚支援学校の計画でもあり、現状に対する理解と未来に対する提案の両面が提案者には求められた。

今回、2段階評価（プレゼンテーション・ヒアリング）に臨んだ各社の提案は、いずれも、与えられた課題に真摯に向き合った質の高い提案だった。最終的には、建物階数、屋内運動場の配置、視覚障害者情報センターの配置、グラウンドや屋内運動場からの音への配慮、周辺環境への配慮と対策、視覚支援学校の建築計画的提案性などが、評価の差異につながった。現在の正門位置や駐車場を東側に移す案も少なくなかったが、それによる交通事情の変化、それが与える周辺住宅地への影響は無視できるものではなく、寄宿舎からの児童・生徒の通

学などを踏まえても、慎重に考えられるべきこととして議論された。

いずれも意欲的な提案をしてくださったことに対して判定委員一同、心から敬意を表し、また感謝申し上げたい。

【選定結果及び講評】

設計候補者：株式会社 山下設計東北支社（B社）

取組体制や業務の進め方、各課題に対する提案において、総合的な観点から最も優れた案と評価された。

視覚障害に対する理解や洞察、現状課題の認識、提案性も含めて総合的に評価が高かった。周辺環境への音の配慮から屋内運動場を西側に設置し、東側にユニット形式の教室棟を持ってくるという大胆な構成の変化を試みた。また建物は2階建てとし、住宅地への景観的ななじみと、勾配屋根を採用した意匠的な提案も好感が持てた。児童・生徒の移動時の安全確保とその建築計画への反映、ユニット型採用による生活動線分離と安定した教育環境の保持、合理的な機能別配置とわかりやすさの確保、周辺住宅地への最大限の配慮とそこでの意匠性の追求など、随所に心配りが見られるバランスの取れた提案と評価した。東側に低層の教室ユニットを配置し、植物園と称する庭を挟み込むことで、緑を介して周辺住宅地とつながる新しい景観を作り出そうとする意欲も評価した。

建築面積が大きくなることによるコスト増、グラウンド側への圧迫感とグラウンド面積の十分な確保の点においては懸念もあったが、今後の設計において十分議論の余地と改善の見込みがあること、それらの課題を踏まえても余りある提案の利点を評価することとなった。何より、視覚支援学校の建築計画的なあり方として全国のモデルとなるような施設整備が期待される。提案の骨格を最大限維持した上での今後の設計を期待したい。ただし、一体的に計画される提案の視覚障害者情報センターと屋内運動場とは、音や振動の影響を慎重に把握しながら計画につなげる必要性もあることから、学校関係者、情報センター関係者との丁寧な対話を通して今後の設計を練り上げていっていただきたいという委員会としての希望を添えて最優秀選定の評とする。

次点：株式会社 楠山設計（A社）

1階部分の見える化と地域とのつながりの提案、既存校舎よりもセットバックさせて校舎を配置することで住宅地に配慮した計画、グラウンド面積の十分な確保、周辺環境との連続性を目指した緑のネットワーク、エントランス周りの車輛動線計画、視覚障害者情報センターの配置計画などは高く評価された。一方で、教室から寄宿舍食堂までの動線距離、あわせてその動線となる生活軸（メインストリート）の屋外設置の考え方、教室とグラウンドへの動線、屋内運動上からの音漏れに対する意識や配慮、幼稚部の配置やアプローチなどでは課題も見えた。最終的には総合的にB社案に及ばず次点となった。

しかし、課題1に対する提案はわずかながら B 社を上回る最高点を獲得した。各機能を空間として明確に分けながらも相互の機能連携を意識した計画は間違いのない提案であり、大変好感が持てるものであった。

令和2年3月30日

視覚支援学校・視覚障害者情報センター改築設計
公募型プロポーザル判定委員会
会長 石井 敏